

## スケール

三井寺のプラットホームに降り立つと、琵琶湖から吹き付ける北風が肌を刺す。坂本に向かう電車を見送りながら、駅員もいない小さな駅の佇まいに驚く。1200年の歴史を誇る総本山三井寺の最寄り駅にしては賑いも華もない。

駅を出て寺に向かって歩き出すと、道沿いの水路を勢いよく水が流れている。その水路に架かる橋を渡る時、何気なく流れの行方を眺めると、50m先の山肌にトンネルが口を開け、流れは闇の中に吸い込まれていく。「そうか、これが琵琶湖の水を京都に運ぶ琵琶湖疎水なんだ」と、その時初めて気が付いた。

明治維新で京都は「千年の都」たる地位を失い、40万人の人口は半分近くになり衰退の一途をたどった。京都の復興のため、時の府知事を明治新政府が全面支援して、琵琶湖から京都まで全長20キロ余りの疎水が完成した。

この大事業は、飲料水の安定確保、船運による物流の活性化に大きな役割を果たすとともに、日本初の水力発電所の建設により、路面電車の走行や軽工業の勃興など京都の再生に大きく寄与することになる。

それにしても「琵琶湖の水を京都に」という、とてつもないスケールの構想を実現した政治家達には、只々畏敬の念を抱く他はない。疎水の要所には伊藤博文、山県有朋など、明治の元勳の扁額が掲げられ、府知事の銅像も建っている。

最近、政治家の不始末が世を騒がせている。明治の政治家達は現代の価値観でいえば、悪の権化のようなところもあるが、政治家としてのスケールでいうならば、良きにつけ悪しきにつけ、現代政治家を軽々と凌駕するように思えるのだ。